



「ペルシャの市場」を合奏 音楽センターアコディオン科初級25・26期、中級6・7期入学修了式と記念演奏会が十月十八日夜、東京・牛込生活館で開かれ、会場いっぱい約三百名が参加してアコディオン科の卵たちの新しい門出を祝福。記念演奏会では、今年の日本のうたごえ祭典(12月10日から四日間・東京)の全国アコ合同曲「ペルシャの市場」を修了生の全員が合奏して、祭典成功への意気込みを示しました。

報知争議の勝利

高らかにうたう

「七〇年代はじめの大型争議」といわれた報知争議がこのほど妥結、会社側の暴力ロックアウトを克服した。労働者側の全面的な勝利でした。十月十三日にはさっそく「報知争議勝利の報告集会」が開かれ、そこで「良心の歴史守りぬけ」(仮題)という創作曲が歌唱指導されました。

ぶんに輪転スクラム組んで
労使協働はねかえす
働くものの心はひとつ
良心の歴史守りぬけ

この歌は、報知新聞、報知印刷の労働者と読売、朝日など新聞のうたごえの人たち、それに音楽センター創作部の人たちがいっしょになって十月十一日につくられたばかりのもので、歌う中에서도すばらしいものにありあけよう、と紹介されたのでした。

良心の歴史守りぬけ!

70年日本のうたごえ祭典にむけて創作

並ぶ重要なテーマとして位置づけられたいあけることを決定。こうして今度の創作曲づくりが具体化したのでした。

者まで、いろんな職種の人たちがいるけど、俺は「ヤヤ」として真実を報道していきたい、良心の歴史をつくりたい、というある記者の言葉にあらわされるように、みんな身振攻撃にまけないで団結してきました。涙が出るほどの感動の連続でした。

報知の仲間、今度つくられた創作曲をもって第二組合員もまきこんだ、職場を明るくする活動にとりこんでいきたい、七〇年日本のうたごえ祭典では、ほかの新聞産業に働く仲間もいっしょになって、報知争議はこうたたかれ、こう勝利したんだということを、歌で全国の仲間にも知らせたい、と抱負を語っています。

創作曲づくりの、まず最初にできたのは「かたいスクラム」という曲。これはロックアウトとされた九月十八日の前日につづられ、すさまじい報知の仲間の前で歌唱指導されました。ところが、うたごえでみんなから出された意見は「ピンとこない」「あんまり実感がわかない」「なごきな……」

昨年未の一時金
報知争議 闘争で、スクラムイキ権など労働基本権を奪い、労働組合の無力化をねらった「平和協定」を報知労働者が拒否してから、会社側は、今年一月に指名ロックアウトを強行するなど報知系労組(報知新聞労組、報知印刷労組など)への組合ぶしの策動を公然と行ない、四月十五日には、暴力団を社内へ導入して無期限全面ロックアウトを通告しました。こうした社会情勢を無視した会社側のやり方、各方面から非難が集中、歌手の藤圭子さんなども含めた二百人を越える文化人からの報知労組支援の署名も寄せられ、争議は大きくひろがりました。また、裁判争議でも、組合側が次々勝利をおさめ、ここに至って会社側は「平和協定」、ロックアウトなどを撤回せざるを得なくなりました。九月十八日、組合側の勝利となりました。

報知の闘争を歌った創作曲をつくる、という動きは、右翼暴力団が社内へ導入された今年四月以前からすでに起っていました。第一回新聞のうたごえ全国祭典(五月五日)をとりこむ中で、この祭典の柱のひとつとして準備されたものの、結局創作曲完成にまで至らず、当日は構成劇が上演されました。

この争議は、組合分裂と五月月近い長期ロックアウト、暴力団の介入という会社側からの最大級の攻撃をねらった、職場の圧倒的多数の労働者の団結を歩みゆらず、会社側のねらいをほとんど粉砕したことで、七〇年代初頭の労働運動における輝かしい勝利として、注目されています。

かいつの間でできたえられました。本当にはじめはどうなることかと思っただけです。新聞社という特質から、記者から印刷労働

「闘争は基本的に勝利した」といっても、本音のたかひはこれからです。ロックアウトで三次にわたる職場復帰がまじまりましたが、会社は第一陣で職場にもどった第一組合員に対して仕事を与えず、室のすみに新聞紙を置いて一日中そこに座らせるなどのヒソヒソな攻撃を、さっそくかけてきています。

しかし、百四十五日間、組合ぶしのロックアウトをねらった第一組合員の団結は、数の上でも職場の中で圧倒的多数を